

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 2946
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
Tel. 0463-59-4111 (内線 2200)

猫の格言！——どのような人材を創ろうか

岡本祥子

経営者についての話の中に、よく耳にする言葉がある。後継者に金を残すのは三流！事業を残すのは二流！人材を残すのは一流！偉い人の名言には、含蓄があるといつも感心している。この提言の深い意味は別として、私のような凡人には、後継者に大金を残せるだけでもすばらしいと思うのにそれを三流といい、社会の中で認められる組織体である事業を健全な姿で残すのも並大抵なことではないなとも考えるが、それを二流という。一流になるためには、企業人となる立派な人材を創っていかなければならぬらしい。

われわれ教育界にいる人間は、特に、金を増やすことがへた！理論どおり起業するのは可能だとしても、それが続けられるような商才があるかどうか考えると、危ないものだ。ましてやその大きくした起業を安定させ、前向きな戦略を立てられる企業家になれるかといえばとうていムリである。もちろん、「私（僕）は、これぐらい出来るさ！」という人もいないかもしれないが、それは教育者ではなく、正に、企業家に向いていますよと言いたい。

多分、ほとんどの教育者は、企業人として限られている人を創り上げるよりも、どの世界にも通じる人間の基礎を創るほうが大変だと自負しているに違いない。なぜならば、前者の創り上げられる人は、いわば才能と努力の持ち主であり、後者は、才能と努力の持ち主を含んだすべての凡人であるからだ。

ただ、別に、ここで教育者の人創りについて述べるつもりはない。むしろ企業の人創りに必要だと思われることについてである。つまり、創りあげた企業人に対し、添景（山水画中に人物や動物などを書き添えて趣をだすこと）としての最後の一点が、「企

業の倫理観」ということではないかと思うからである。企業倫理(business ethics)という言葉は、基本的に、起業行動とそれを実現する企業内における人間の行動に関して意思決定の根幹となるものである。企業の行動は、投資家・消費者に大きな影響を与え、あるいは社会や環境に深刻な被害を与えるものであるからこそ、常に高い倫理性を持って行わなければならないと私は思うのである。ここ数年、いくつかの企業が利益だけ求めることで、企業としての倫理観が地に落ちているだけに、特に考えさせるものがある。

たぶん、現実のほとんどの企業においては、経営者をはじめとした会社の行動に関係する一人ひとりの人間が、個々の現場において倫理的に正しい判断を行っているだろう。それに、各種法令の遵守体制ができている企業の倫理は、大変に高いものであるだろう。

企業を動かしているのが、一人ひとりの人間である以上、企業倫理の実践において最後に問題となるのは、個人の人々の倫理感である。根源的な人間のあり方は共通することが多いので、社会全体にも同じことが言えるのである。

最後に、猫好きな私は、企業や人に対する格言をちよつとあてはめてみた。

企業は、鼠無きを以て捕らざるの猫を養うべからず。そうです！企業は無能なものを養わないのです。だまり猫が鼠を捕る。派手な行動をしないで黙々としている人が、人の知らぬ間に大事を成し遂げるものです。そうです。このような人は怖いんです！

A mewing cat is never a good mouser. 英語でもありました。口数の多い人に限って口ばかりで実行が伴わない。

(所員/おかもと・しょうこ)

2007年度懸賞論文審査結果

国際経営学会主催の懸賞論文審査の結果が発表されました。本年の応募論文は195篇でした。研究論文部門では、優秀賞に「時代に即した新たなチラシの提案 -5つの企業と1カ所のクリニック、20カ所の病院への取材から-」(小林亮介)、「地域特有のエコツーリズムの発展と可能性 -地球環境に対する理解促進と地域の活性化を目指して-」(石川真由美)、「監査の独立性と監査人の監督機関 -アメリカと比較した日本の監査制度に焦点をあてて-」(久野和也)の3篇が選ばれました。

奨励賞には、「派遣企業の今後」(代表、中塚祐太)、「国際機関のコーポレート・ガバナンス原則に関する研究」(山田洋)、「21世紀における住宅産業の役割」(江川正道)、「世界におけるCSRの広まりと日本の課題」(中塚純太)、「多様性を包含する組織」(杉山光太郎)、「子どもに必要な死の教育」(児玉暁郎)、「組織革新とリーダーシップ」(桑原孝治)、「インターネット映像コンテンツ配信の課題と将来」(根岸真広)、「IT企業が行うべき地域貢献とは」(庄司華織)の9篇が選ばれました。

研究レポート部門では、「コーポレート・ガバナンスと内部統制システム -三菱自動車の不祥事への対処に焦点をあてて-」(松崎大明)が優秀賞に選ばれました。奨励賞は、「介護ビジネスプランの提案」(代表、坂上啓)、「日本の企業経営機構とコーポレート・ガバナンス」(代表、江川正道)、「日本における企業の情報開示とIR活動」(檜山宗志)、「企業と告発」(藤田優輝)、「格差問題の本質と人々の意識」(代表、西村悟)、「小売業の企業経営機構比較」(山中陽平)、「JALにおける企業

不祥事と労使関係」(折井美穂)、「日本人と禁煙に関する一考察」(早川洋之)、「日本の教育について」(吉田英里奈)、「日本とオタク文化の変化と未来」(脇坂勇哉)、「地雷に関する一考察」(田淵沙紀)、「企業不祥事と法人の犯罪能力」(小山大介)、「コーポレート・ガバナンスの機能と利害関係者」(明山健師)、「国税専門官について」(森山祐策)、「企業不祥事と社会的責任」(釣川貴之)の15篇でした。

国際経営研究所客員研究員

2008年度は、荻原富夫、畑中邦道、坂井原良夫、李貞和、山内清史の5氏が国際経営研究所の客員研究員として承認されました。各研究プロジェクトへの参加、フォーラムへの投稿等、5氏の活躍と貢献を期待しています。

新任常任委員

松岡教授、三村教授、行川教授に代わり、国際経営研究所の常任委員として、奥邨弘司准教授、木村章男准教授、小島大徳准教授の3名が選出されました。若いエネルギーで国際経営研究所の変革に貢献していただけるよう期待しています。松岡教授、三村教授、行川教授の貢献に感謝いたします。特に松岡教授は、国際経営研究所フォーラム講演会の開催のため多大な時間と労力を費やしていただきました。フォーラム講演会の成功は松岡教授の貢献が大であったことを付記させていただきます。

新規共同研究プロジェクトの募集

1件につき、予算は年間40万円程度で、3件採択する予定です。締切日は4月22日(火)です。ふるってご応募ください。

T.S. Eliot の批評論から現代社会の荒廃を読み解く

齋藤 純一

最近の大学生は古典や文学を読まなくなったとよく耳にする。T.S.Eliot (1888-1965) という 20 世紀最大のキリスト教詩人に会ったのは今から 30 年前のことである。当時は英米文学、仏文学、そして独文学という研究領域が文学部では顕著な存在であった。英文学を研究することで身を立てるという行為は当時は無謀なことといわれていた。経済学や法学で身を立てるのが通常の進路と考えられていた。しかし身の回りに文学で身を立てようとする自分を批判しようとする人がいなかったのは幸いであった。

英文学を研究することは人間そのものを研究することであり、人間の心の機微の部分にまで入り込む深遠な分野と考えていた。T.S.Eliot を選んだのは、彼の唱える深遠な文化理論に惹かれたからである。Eliot はキリスト教詩人の立場から当時キリスト教の信仰が薄れ、分裂傾向にあったヨーロッパ社会の統合を唱えた人物である。むしろ多くの人はミュージカルのキャッツの原作者といったほうがピンとくるかもしれない。ニューヨークのミュージカルはいつも満員であったが、残念ながら今はもう上演されていない。ミュージカルを見たときも廃屋に住む猫たちの中にその共同体を統一する猫が出たりする場面にヨーロッパの社会のもつ分裂統合を感じ取って鑑賞していたように覚えている。

最近でも教育の荒廃という話題を論じる際に Eliot の文化論や教育論に言及されることがよくある。戦後日本はアメリカの資本主義を手本に社会を発展させていったが、ここ 10 年はアメリカの抱える諸問題が経済、教育、そして社会一般に噴出してきている。個人主義や自由主義が日本の古い習慣や制度を打ち破る要素として唱えられてきたが、日本古来の伝統や価値観を廃しての西欧化は最近の日本人のアイデンティティーの揺らぎと無関係ではあるまい。

Eliot は常に伝統に立脚することの大切さをあらゆる批評の中で唱えている。社会の中心的な価値観を失いつつあるかのような日本社会で

「伝統と個人の才能」は、現代の混沌とした時代の中で何を基準に生きていけばよいのかという指針を与えてくれるような気がする。専門分野のいかんにかかわらず「伝統と個人の才能」は現代人にとって必読といっても過言ではなかろう。伝統論と並んで、「文化の定義のための覚書」はヨーロッパ社会の抱える問題とともになぜヨーロッパ社会に圧倒的な存在感があるのかということを含めさせてくれる論文である。この「覚書」に対して何人かの作家や評論家が辛らつな批判の矛先を向けている。

社会主義者のハロルド・ラスキーは Eliot のキリスト教文化論は一部のキリスト教エリートに対するメッセージであり、多くの一般人に向けての普遍的な文化論ではないと述べている。

また、ジョージ・スタイナーは Eliot の文化論には 20 世紀最大の悲劇であるホロコーストに対する言及がないことから「覚書」は魅力のない論文であると辛らつに批判している。Eliot は宗教という言葉を使用するとき特

定の宗教に限定して使っているのではないことを所々で明示している。Eliot は広く人類の救いという見地から特にキリスト教を通してのヨーロッパ文化の再統合ということを唱えているのである。特に「覚書」は端々に深遠な思想が散りばめられていて何度読んでもその都度新しい発見がある。Eliot の思想はエリートだけに向けられたものという批判も Eliot の広い見識や社会での経験を踏まえると次第に Eliot のすべてを包み込む深遠な文化論に打ち負かされてしまうような気がしてならない。

文学が読まれなくなり、文学的価値観が疎んじられる昨今であるがもう一度 20 世紀最大の詩人であり、文化評論家でもあった Eliot の思想に触れてみるのも無駄ではあるまい。

古典はいつの世でも人生や社会における諸問題を解決する鍵を握っていると言われるが、現代日本の社会や教育の抱える問題点を古典や文学などから考えてみるというのも必要なかもしれない。

(所員/さいとう・じゅんいち)

研究余滴

不思議な勉強会の成果の1つ

— 公開セミナーを終えて —

3回目の公開セミナーが去る11月10日に平塚市内の勤労会館大会議室で開催されました。テーマは「経営の社会性—ヒトづくり、モノづくり、街づくり、そして〇〇〇づくり」でした。今回の主な成果をかいつまんでご紹介しましょう。

・ パネリストの多様性：

あいうえお順(敬称、所属組織一部略称化)で伊東昭典(プレスト、代表取締役)、大蔵律子(平塚市、市長)、大橋照枝(麗澤大学、教授)、照屋行雄(神奈川大学、教授)、西井たまえ(神奈川県湘南地域県政総合センター、部長)、真壁潔(湘南ベルマーレ、代表取締役)の6名である。民、官、公、学という多方面分野からお集まりいただいた。経営の社会性を語るのに、まさしく時宜を得たメンバーであるといえよう。

・ 独自の可能性を引き出す仕掛け：

副題にある最後の“〇〇〇づくり”には、お仕着せではない独自の考えを開示していただいた。“底辺づくり”“知的資源づくり”“満足度づくり”、“仕組みづくり”“公けづくり”“連携づくり”“みえる化づくり”“文化づくり”などが明示的に語られた。キーワードからは、個人、家庭、集団、組織、地域、社会、国家などと対象枠を広げても縮めても共通の因子が隠れていることに気づく。それは個の確立と周囲との連携意識である。

出身母体がどこであれ、識者の潜在意識のなかに何となく存在しているものを言葉や行動で表すときに表出化してくるのは、自己と

他者とのかわりであることが明らかになりました。最近読んだ植物関係の本のなかに、葉、芽、花、実には太陽光が必要であるのに対して、茎の一部や根にとって太陽光は邪魔で、むしろ太陽のあたらない土壌の中でしか生きられない、ということを知りました。根や茎は花を咲かせ実をつけさせるために重要な役割を果たしていることは充分に分かるものの、一生陰の存在であることにはいささか抵抗感があります。しかし自分の役割が何であるかを一度は考えてみることも大切であるように思います。名づけて social leadership です。

平塚の若手経営管理者を中心にして2003年度にスタートした勉強会は、毎年リーダーシップにかかわる文献を輪読しています。レジュメを作成し、報告し、疑問点を討議する形で運営されています。その副産物として生まれたのが今回ご紹介した公開セミナーです。毎年エッセイ集も発行しています。

このような協働作業をとおして、仲間の中に事後的に“社会性”が生まれてきたように思います。いわゆる個から発信する波紋が周囲と連動することによって引き起こされる“さざ波”効果のようなものです。わが社を超えて広域空間を意識し、地域密着型の大学の目指すべき方向性の1つを示しているのかも知れません。

ミツバチやありんこ、めだか、すずめ集団のような雰囲気があります。飲み会も欠かさず行っています。ちなみに会の名前は WINE です。WINE の語源も含めて興味のある方は一度、ぜひお出かけください。

(所員/えびざわ・えいいち)

ebisae01@kanagawa-u.ac.jp